

特集

糖尿病のある子どもの看護 ～小児糖尿病看護の新しいかたち～

特集にあたって

治療の進歩に合わせた 新しい小児糖尿病看護を学ぼう!

2021年は、1921年にカナダのトロント大学で、バンティング医師とベスト医師がインスリンを発見してからちょうど100年という記念すべき年にあたります。インスリンの発見前は、1型糖尿病は死の病でした。飢餓療法という低炭水化物食が患者に強いられ、ミイラ化して亡くなるのを待つのみで、多くの幼い命が失われていました。しかし、インスリンの発見によって、やせ細った幼い子どもの命が救われるようになり、近年では、新たなインスリン製剤やグルカゴン点鼻薬の開発だけでなく、インスリンポンプや血糖測定器などの医療デバイスもますます進化しています。

このような治療の進歩により、子どもの年齢や生活スタイルに合わせたインスリン製剤や新しいデバイスを上手に使うことで、糖尿病のセルフコントロールが容易になってきました。一方で、子どもたちは、薬剤の種類と作用に関する新しい知識と、医療デバイスに関するスキルも習得することが求められています。また、ポンプや持続血糖モニタリング(CGM)による皮膚トラブルなど、新たな治療法による問題や負担も抱えています。このような状況を考えると、看護者も新しいインスリン製剤や医療デバイスに関する知識を常にup-to-dateし、根拠に基づいた新たな支援方法を開発・提供することが求められています。

治療がどんなに進歩しても、糖尿病合併症のリスクは常に存在します。Rawshaniら¹⁾は、スウェーデンの1型糖尿病患者27,195人と糖尿病のない13万5,178人(対照群)を10年間追跡し、全死亡率や心血管疾患の発症率を比較検討しました。その結果、10歳までに1型糖尿病と診断された若年発症の患者は、心血管疾患の発症や早期死亡のリスクが高いことが示されています。このことから、将来の合併症のリスクを最大限減らすためには、できるだけ早い時期から子どものセルフケア能力を高める支援が非常に重要となります。そのためには、糖尿病をもつ子どもにかかわる看護者は、子どものセルフケア能力を適切に評価し、発達段階に合わせた無理のない支援を継続しなければなりません。

子どものセルフケア能力を高める場として活用されているのが、全国50カ所で毎年開催されている小児糖尿病キャンプです。キャンプでは、医師・看護師だけでなく、栄養士、薬剤師、臨床検査技師などが一堂に介して、子どもの療養支援を行う教育の場としてだけでなく、同じ病気をもつ子どもたちが出会い、支え合いながら糖尿病をもつ自分

の存在を認め合う拠り所です。しかし、2020年は、COVID-19の感染拡大により、57年の歴史をもつ小児糖尿病キャンプが全国一斉に、初めて中止となりました。キャンプの中止によって、糖尿病教育の場が閉ざされてしまいましたが、代わりに、ふだんの外来における糖尿病教育の質を高めたり、オンラインで支援を継続したりするなど、状況に即した支援方法を編み出すことが必要です。

そして、小児糖尿病看護において、移行期支援もますます重要になっています。2015年から小児慢性特定疾病児童成人移行期医療支援モデル事業が開始され、小児糖尿病患者が成長するなかで、より適切な医療を受けられるように「成人医療機関への移行」をどう進めるのか、また患者や家族を起点として、医療費助成対象となる指定難病への申請を可能とする仕組みをどう設計するのか議論されました。その結果、小児期発症慢性疾患をもつ患者のための移行支援・自立支援の情報共有サイトの設立や、全国の病院で移行期外来が開設されています。また、日本小児内分泌学会移行期対応委員会が1型糖尿病の移行期医療支援ガイドやチェックリストを作成し、学会ホームページに掲載しています。さらに、日本糖尿病協会では、小児科と内科の橋渡しをする内科医師にコーディネーターの役割を担当してもらい、「移行期医療コーディネーター制度」が設けられました。看護においても「小児」という枠を超えて、大人への第一歩を安心して踏み出せるような継続支援がますます重要になっています。

本特集では、糖尿病をもつ子どもや家族にかかわる専門職の方々に、最新の糖尿病の治療、看護、研究についてご執筆いただきました。本特集が、小児糖尿病看護の新たな時代に向かって、糖尿病をもつ子どもと家族にかかわる看護職のみなさんに役立つものになればと考えております。

【文 献】

- 1) Rawshani A, Sattar N, Franzén S, et al : Excess mortality and cardiovascular disease in young adults with type 1 diabetes in relation to age at onset : A nationwide, register-based cohort study. *Lancet* 392 (10146) : 477-486, 2018.

愛媛大学大学院医学系研究科看護学専攻教授
薬師神裕子 Yakushijin Yuko